

丹波古文書倶楽部会報
古文書かわら版

号外

大和路歴史探訪記

◆ 春日町 小西敏晴

春日歴史民俗資料館文化財友の会が、昨秋「歴史探訪バス旅行」を実施した様子を報告します。

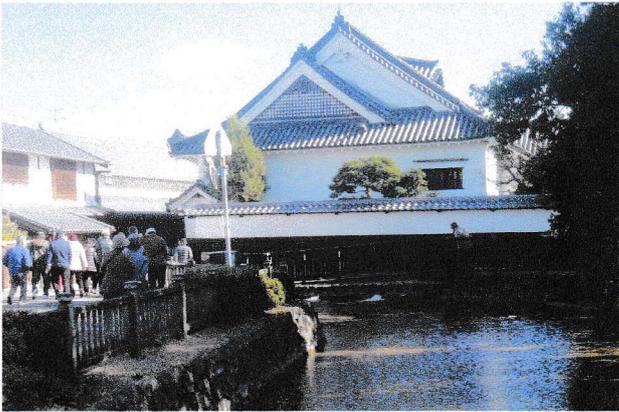
(重要伝統的建物群保存地区) 今井町(橿原市)平成五年指定

今井町の成立歴史は、天文年間この地に向宗本願寺坊主の今井兵部郷豊寿が、寺内町を建設したのに発し、一向宗門徒が、ここに御坊(称念寺)を開き、自衛上武力を養い、壕をめぐらし都市計画を実施した。永禄十一年(一五六八)織田信長の上洛以来、本願寺も反信長の旗を立て、寺を中心の城塞都市を整え抵抗したが、今井氏は、天正二年、明智光秀を通じて降伏し、事なきを得た。かくして、大坂、堺などと交流を盛んにして、商業都市としての変貌をとげ、江戸時代には南大和最大の在郷町として大いに栄えた。また、堺と並び自治的特権が認められ、惣年寄、町年寄を置き町政にあたらせた。

今井町の町並みは、称念寺を中心とした寺内町であり、完全な城塞都市で、江戸時代初期には、東西六百m、南北三百m、周囲には環濠土塁

発行・編集者 延陽伯こと岸孝明
発行所 丹波古文書倶楽部
連絡先 090-8882-5537

を築き、戸数千百戸、人口四千数百人の豊かな町となり、町割は、西、南、東、北、新、今の六町に分れ、九つの門から木橋を通って濠を渡り、外部と連絡しており、内部の道路は、屈折が多く敵の侵入に備えて、見通し、三矢鉄砲の射通しを、不可能にしたものであった。当初は軍事目的だったが、江戸中期には、裕福な商人の生命財産を守るものに変貌した。いまも、町の大半の民家が、江戸時代以来の伝統様式を保っており、国重要文化財九件、市文化財五件等、優れた民家が多く、町全体が戦国時代の寺内町の歴史を遺している。



今井町を守る環濠と豪壮な今西家住宅

此の町を地元ガイドの案内で見学した。まず、今井まちなみ交流センター「華薨」(明治三十六年に高市郡教育博物館として建築され、昭和四年からは今井町役場として使用され、現在は今井町の歴史資料館として展示、映像等で、今井町を紹介している。二階建の本館を中心に、両側に左右対称の翼廊のある外観は、大和に相応しく、和風に纏めた奈良でも数少ない明治建築である。(国重文指定)



旧今井町役場 交流センター「華薨」

(二)で町全体の説明を受けた後、町並みを見学した。主な見学処は、今西家住宅、今西家三代目からは惣年寄筆頭で、領主、代官の町方支配の一翼を担い、自治権を委ねられていた。八つ棟造りは、役柄相応の建



物で、民家と云うよりは城郭を思わせる構造で、内部には、広い土間があり、白洲として使われており、その中二階には、燻し牢が有る。棟札により、慶安三年(一六五〇)の建築で、一時は、織田信長の本陣になつた事もある。外壁は白漆喰塗りで、入母屋造の破風は前後喰違いに見せ、本瓦葺の堂々たる外観である(国重文)。次ぎに和銅三年(七一〇)より七十五年間築えた平城宮跡にある平城宮跡資料館を見学した。一九五九年から継続されてきた発掘調査によつて、出土した様々の遺物や建物の復元模型を展示しており、ボランティアガイドの案内で、平城宮の役所や宮殿の内部の実物大模型(シオラマ)で、役人の仕事ぶりや、皇族の暮らしを映像で見学、発掘で出土した、土器、木器、瓦、木簡等の実物を間近に見学した。

今月は、平成二十九年秋期特別展、「地下の正倉院展―国宝平城宮跡出土木簡―」が、開催されていた。平成二十九年九月、「平城宮跡出土木簡」が、国宝に指定された。木簡はいままで重要文化財指定はあったが、国宝指定は初めてで、そのお披露目の特別展示でした。

遠い昔、「ミ」として捨てられながら、千三百年の眠りの後、掘り起こされ、国宝にまで登りつめた数奇な運命に想いを馳せつつ見学した。特に目を引いたのは、

「丹波国何鹿郡高津郷交易小麦五斗」と書かれた木簡で、綾部市からも小麦が献上されていたことが興味深かった。全国的に、小麦の荷札は極めて稀との事。(長さ二四一mm、巾二八mm、厚さ五mm)

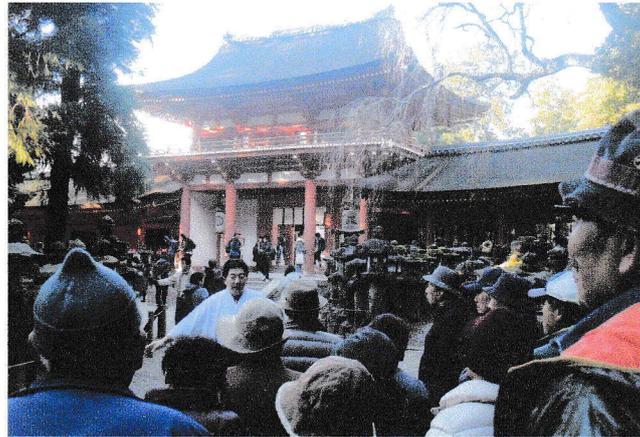


34 田期

30 田期

⇒丹波国何鹿郡高津郷交易小麦五斗 と読める木簡

最後は、春日大社の参拝です。駐車場近くの、二の鳥居付近で、案内して頂く神官と待合せた。まず、立並ぶ石灯笼から説明を受けた。



平安の貴族から江戸の庶民等より寄進された灯笼は、石灯笼二千基、

釣灯笼一千基、計三千基に及ぶという。鹿をモチーフにした彫物が多く、多様な姿態が面白い。南門より神域に入り、釣灯笼のある朱塗りの回廊を、奥に登り、

御蓋山遥拝所に着く。ここで、春日大社の御祭神として招かれた、武甕槌命が、白鹿に乗って天降られた御蓋山山頂の浮雲峰を拜む

回廊より中門に進み、まず、桂昌院寄進の大灯笼が目につく。中門より、奥の御本殿に参拝した。

中門の左右に延びる御廊に懸る釣灯笼は、將軍綱吉、藤堂高虎、宇喜多秀家等武将の寄進になるものが多いであった。続いて、藤浪之屋に案内された。暗い部屋には、灯がともされた多数の釣灯笼が、後ろに張り巡らされた鏡で、万華鏡のように映え、年三回すべての灯笼に淨灯が灯る万燈籠の幽玄が体験出来た。後、多くの境内社や施設の案内を受け、今回の歴史探訪を終えました。

◆丹波古文書倶楽部会員各位へ (一) 依頼

春日歴史民俗資料館文化財友の会は、今年を以て、休会いたします。会員役員の高齢化により運営が困難化したためです。以前より、活動していた、歴史探訪の会と春日歴史民俗資料館友の会が、平成五年に合併

して発足した本会は、最盛期には、三百人の会員を擁し、年二回の歴史探訪は、関西中心ですが東は甲斐、北は能登、南は高千穂まで訪れ、其の外、講演会の開催、地域歴史の掘り起こし等、個人見識の向上と町文化活動の高揚にいささかの貢献をしておりますが、本当に残念の極みであります。

休会の後も、後継者を募り、再開に向かつて、努力しておりますが、町以外の方々、丹波古文書倶楽部会員の皆様の応援を、お願い致しく存じております。(小西敏晴 記)

編集後記(金棒引き)

私は、小西さんの勧めでこの旅に飛び入り参加させてもらいました。車中の雑談の時間に、かねて調べてみたいと思っていた春日町野山出身の村上専精先生に関して、野山自治会長さんから、調べたいならば我が家において、と誘われ、後日、お宅にお邪魔して貴重な情報を戴くことが出来ました。

そんな経験から、歴史や古文書等に関する貴重な情報交換の場でもある事を知りました。

こんな意義ある活動を絶やすことは、丹波地域の文化の灯を消すこと、是非、皆さんの力を頼りに、この会の再興を図ってみたい、と強く思っています。加担して下さい方は、岸孝明迄ご連絡ください。